

医療機関受診前の一般用医薬品の使用実態に関する調査

主任研究者 北里大学薬学部 望月眞弓
研究協力者 北里大学薬学部 橋口正行
東邦大学医療センター大森病院薬剤部 黒川實
昭和大学附属豊洲病院薬局 末永美由紀

経緯：

薬事法において、薬局開設者等は、一般用医薬品（以下 OTC 薬）の販売時には消費者に対して適正な使用のために必要な情報提供を行うことが努力義務とされている。特に薬剤師等には、医薬品の専門家として国民の医薬品に関する相談等に応じ、消費者への OTC 薬の適切な選択の支援及び必要に応じた受診勧奨を行うことが強く求められている。しかしながら、これまでの報告¹⁾では販売時に必ずしも十分に情報提供が行われていないとする意見も多く、このような制度と実態の間の乖離は、今後のセルフメディケーションの実施において重要な課題であるが、この乖離を科学的に調査した情報は少ない。また、OTC 薬の販売と情報提供は切り離せない関係にあり、早急に販売時の情報提供と消費者の使用の実態ならびにそれにより生じる影響を適切な方法で調査する必要がある。なお、これまでに日本で行われた OTC 薬に関する調査^{2)、3)、4)}では、対象者は主に新聞・インターネット等で募集され、その結果、OTC 薬に関心の高い消費者に偏っている。

そこで、本調査では、対象の選択における偏りを少なくするために、OTC 薬を使用した者、しなかった者の両者を含む医療機関の受診者を対象とした。具体的には、OTC 薬で対処する可能性のある症状のうち、感冒症状、消化器症状、頭痛のいずれかの症状を訴え、医療機関を受診した患者を対象とし、消費者の受診前の OTC 薬の使用状況、使用前の添付文書等の確認状況についてアンケート調査を行った。

目的：

本調査では、下記のことを明らかにし、OTC 薬の適正使用に向けて販売時の情報提供のあり方を検討するための材料を提供することを目的とする。

- (1) 受診前の OTC 薬を購入する際の情報提供の状況
 - ・ OTC 薬を購入する際の販売者の説明状況
 - ・ OTC 薬を購入する際に販売者の説明を受けなかった理由
- (2) OTC 薬使用の実態
 - ・ 受診前の OTC 薬使用状況
 - ・ OTC 薬使用前の添付文書等の確認状況
 - ・ OTC 薬使用前の相談有無
 - ・ OTC 薬使用時の添付文書の記載事項（用法・用量、服用日数）の遵守
- (3) 当該症状（感冒症状、消化器症状、頭痛のいずれか）に対する診断名

方法：

(1) 調査実施期間 2005年1月17日～2月28日および2005年10月1日～2006年3月31日

(2) 対象 東京都内一般病院（1施設）、大学病院（1施設）を受診した外来患者、大学病院（1施設）を受診した入院患者のうち、感冒症状、消化器症状、頭痛のいずれかを訴え、本調査への参加に同意が得られた15歳以上の者とした。なお、対象となる外来患者、入院患者は、下記の条件を満たす者とした。

- ・外来患者

- ①感冒症状、消化器症状のいずれかを訴えた、今季、初診の患者

- ②頭痛を訴えた初診および再診の患者

- ・入院患者

調査実施日より過去1年以内に感冒症状、消化器症状、頭痛のいずれかを訴え、受診した経験を持ち、現在も当該症状を持つ入院患者

(3) 調査方法

①症状に応じて、アンケート用紙（付表1、2、3）を配布し、記入完了後回収した。

下記の項目についてアンケート調査を行った。なお、対象者のうち、入院患者および頭痛を訴えた再診の外来患者においては、当該症状の初診時について調査した。

- ・受診前のOTC薬使用状況

- ・OTC薬の購入先

- ・OTC薬を購入する際の販売者の説明状況

- ・OTC薬使用前の相談有無

- ・OTC薬を購入する際に販売者の説明を受けなかった理由

- ・OTC薬を使用しなかった理由

- ・OTC薬使用時の添付文書の記載事項（用法・用量、服用日数）の遵守

②アンケート調査終了後に、病院内の診療録をもとに、同意取得日の対象症状（感冒症状、消化器症状、頭痛のいずれか）に対する診断名を確認した。

結果：

・対象者の背景

対象者数 499 人（感冒症状 258 人、消化器症状 132 人、頭痛 109 人）で解析を行った（表 1）。職業については、対象者のうち「会社員」が 224 人（44.9%）と最も多く、次いで「主婦」85 人（17.0%）、「自営業」36 人（7.2%）の順であった。（表 2）。対象者の居住地区では、「港区」が最も多く、対象者の 39.3% を占めた（表 3）。性別、年齢、職業、同居人の有無、居住地区は、3 症状間で統計学的有意差はみられなかった（ χ^2 検定 $P > 0.05$ ）。

表 1 対象者の性別、同居人の有無、年齢

	感冒 N=258	消化器症状 N=132	頭痛 N=109	合計 N=499
男性 (%)	119 (46.1)	51 (38.6)	44 (40.3)	214 (42.9)
女性 (%)	139 (53.9)	81 (61.4)	65 (59.7)	285 (57.1)
同居人あり (%)	187 (72.5)	107 (81.1)	78 (71.6)	372 (74.5)
年齢 (平均±SD)	43.2±17.7	46.3±18.9	42.6±15.6	43.9±17.6

表 2 対象者の職業

	感冒 N=258	消化器症状 N=132	頭痛 N=109	合計 N=499
会社員 (%)	123 (47.7)	61 (46.2)	40 (36.7)	224 (44.9)
主婦 (%)	38 (14.7)	27 (20.5)	20 (18.3)	85 (17.0)
自営業 (%)	17 (6.6)	9 (6.8)	10 (9.2)	36 (7.2)
学生 (%)	12 (4.7)	5 (3.8)	5 (4.6)	22 (4.4)
医療従事者 (%)	11 (4.3)	6 (4.5)	4 (3.7)	21 (4.2)
無職 (%)	24 (9.3)	7 (5.3)	8 (7.3)	39 (6.0)
その他 (%)	31 (12.0)	9 (6.8)	14 (12.8)	54 (10.8)
無回答 (%)	2 (0.8)	8 (6.1)	8 (7.3)	18 (3.6)

表3 対象者の居住地区

	感冒 N=258	消化器症状 N=132	頭痛 N=109	合計 N=499
千代田区 (%)	1 (0.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.2)
中央区 (%)	3 (1.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (0.6)
港区 (%)	103 (39.9)	46 (34.8)	47 (43.1)	196 (39.3)
江東区 (%)	14 (5.4)	4 (3.0)	1 (0.9)	19 (3.8)
品川区 (%)	18 (6.2)	8 (6.1)	11 (10.1)	37 (7.4)
大田区 (%)	35 (13.6)	20 (15.2)	14 (12.8)	69 (13.8)
渋谷区 (%)	18 (7.0)	6 (4.5)	11 (10.1)	35 (7.0)
目黒区 (%)	5 (1.9)	4 (3.0)	3 (2.8)	12 (2.4)
世田谷区 (%)	8 (3.1)	5 (3.8)	1 (0.9)	14 (2.8)
新宿区 (%)	4 (1.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (0.8)
中野区 (%)	4 (1.6)	1 (0.8)	0 (0.0)	5 (1.0)
板橋区 (%)	2 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.9)	4 (0.8)
練馬区 (%)	1 (0.4)	0 (0.0)	3 (2.8)	4 (0.8)
文京区 (%)	0 (0.0)	3 (2.3)	0 (0.0)	3 (0.6)
足立区 (%)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.9)	1 (0.2)
杉並区 (%)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.9)	1 (0.2)
北区 (%)	0 (0.0)	1 (0.8)	0 (0.0)	1 (0.2)
東京 23 区外 (都下) (%)	9 (3.5)	4 (3.0)	1 (0.9)	14 (2.8)
東京都以外の地域 (%)	31 (12.0)	25 (18.9)	14 (12.8)	70 (14.0)
無回答 (%)	2 (0.8)	4 (3.0)	0 (0.0)	6 (1.2)

表4 対象者の訴えた感冒症状（複数回答可）（N=258）

	対象者数(人)	割合 (%)
発熱 37～38℃	100	38.8
発熱 38℃以上	88	34.1
関節痛	100	38.8
筋肉痛	47	18.2
のどの痛み	150	58.1
頭痛	108	41.9
疲労（だるい）	129	50.0
悪寒	121	46.9
吐き気・嘔吐	35	13.6
下痢	31	12.0
咳	161	62.4
痰	76	29.5
くしゃみ	70	27.1
鼻水	124	48.1
鼻づまり	54	20.9
その他	19	7.4

対象者の訴えた症状のうち、感冒症状、消化器症状について概要を示した（表4、5）。また、頭痛については、症状発現頻度および重症度を示した（表6、7）。

感冒症状では、最も多かったのは、「咳」（62.4%）であり、次いで「のどの痛み」（58.1%）、「疲労（だるい）」（50.0%）であった。消化器症状では、最も多かったのは、「胃痛」（56.1%）であり、次いで「腹部膨満感」（25.8%）、「むかつき」（25.8%）であった。

頭痛の頻度では、最も多かったのは、「年1～5回」（34.9%）であり、次いで「はじめて」（24.8%）「月4回以上」（20.2%）、「月1～3回」（17.4%）であった。また、「年1～5回」、「月1～3回」および「月4回以上」を合わせると頭痛を訴えた対象者の約70%は、これまでも頭痛を経験していた。また、頭痛の重症度では、「中等症」、「重症」を合わせると約60%が、頭痛により日常生活や仕事に影響があると回答した。

表5 対象者の訴えた消化器症状（複数回答可）（N=132）

	対象者数（人）	割合（％）
胸焼け	13	9.8
むかつき	34	25.8
胃のもたれ	33	25.0
食欲不振	15	11.4
げっぷ	22	16.7
腹部膨満感	34	25.8
胃痛	74	56.1
背部痛	23	17.4
その他	43	32.6
下痢	7	5.3
腹痛	20	15.2
悪心・嘔吐	9	6.8
ふらつき	2	1.5
張り	1	0.8
肩の痛み	1	0.8
腸	1	0.8
やせた	1	0.8
人間ドックで指摘あり	1	0.8
記載無し	1	0.8

表6 頭痛の頻度（N=109）

	対象者数（人）	割合（％）
はじめて	27	24.8
年1～5回	38	34.9
月1～3回	19	17.4
月4回以上	22	20.2
無回答	3	2.8

表7 頭痛の重症度（N=109）

	対象者数（人）	割合（％）
生活に支障がない（軽症）	33	30.3
日常生活や仕事に影響がある（中等症）	50	45.9
日常生活や仕事が不可能・寝込む（重症）	18	16.5
無回答	8	7.3

・受診前の OTC の使用状況

感冒症状、消化器症状、頭痛に対する受診前の OTC 薬（以前に当該症状に対して処方された薬との併用含む）使用率は、それぞれ感冒症状 56.5%、消化器症状 46.2%、頭痛 50.4%であり、3 症状間で統計学的な有意差は見られなかった（表 8）（ χ^2 検定 P=0.135）。

表 8 受診前の OTC 薬使用状況

	感冒 N=258	消化器症状 N=132	頭痛 N=109	合計 N=499
OTC 薬使用あり (%)	146 (56.5)	61 (46.2)	55 (50.4)	262 (52.5)
OTC 薬 (%)	134 (51.9)	56 (42.4)	54 (49.5)	244 (48.9)
処方薬と OTC 薬 (%)	12 (4.6)	5 (3.8)	1 (0.9)	18 (3.6)
OTC 薬使用なし (%)	112 (33.5)	71 (53.8)	54 (49.6)	237 (47.5)
処方薬 (%)	36 (14.0)	20 (15.2)	9 (8.3)	65 (13.0)
使用なし (%)	76 (29.5)	51 (38.6)	45 (41.3)	172 (34.5)

受診前に当該症状に対し、OTC 薬を使用しなかった理由では、OTC 薬を使用しなかった者（N=172）のうち最も多かった回答は「普段、医療機関を受診するため」38 人（22.1%）であり、次いで「OTC 薬の効果を信頼していないため」22 人（12.8%）であった（表 9）。消化器症状のあった患者においては、「現在、他の病気で通院しているため」が 20%近くあり、他の症状とは異なっていた。なお、「その他」には、主な理由として「すぐに治ると思ったから」、「適切な薬を服用したい」、「副作用が怖い」などがあつた。

受診前に当該症状に対し、OTC 薬を使用した理由では、OTC 薬を使用した者（N=262）のうち最も多かった回答は「OTC 薬が家にあつたから」147 人（56.1%）、「受診する時間がなかつたため」86 人（32.8%）、「普段、OTC 薬を使用するため」69 人（26.3%）であった（表 10）。OTC 薬を使用した理由、使用しなかった理由については、感冒症状のあった患者において「普段、OTC 薬を使用するため」が 35.6%、「受診する時間がなかつたため」が 41.0%と、他の症状の約 2 倍であつたことを除いて、3 症状間で差はなかつた。

表 9 受診前に OTC 薬を使用しなかった理由（複数回答可）（N=172）

	感冒 N=76	消化器症状 N=51	頭痛 N=45	合計 N=172
普段、医療機関を受診するため（%）	20 (26.3)	11 (21.6)	7 (15.6)	38 (22.1)
現在、他の病気で通院しているため（%）	2 (2.6)	10 (19.6)	2 (4.4)	14 (8.1)
OTC 薬の効果を信頼していないため（%）	9 (11.8)	7 (13.7)	6 (13.3)	22 (12.8)
OTC 薬を購入する時間がなかったため（%）	9 (11.8)	1 (2.0)	3 (6.7)	13 (7.6)
OTC 薬の価格が高いため（%）	1 (1.3)	3 (5.9)	0 (0.0)	4 (2.3)
家に OTC 薬がなかったから（%）	7 (9.2)	8 (15.7)	4 (8.9)	19 (11.0)
その他（%）	13 (17.1)	22 (43.1)	29 (64.4)	64 (37.2)
無回答（%）	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.2)	1 (0.6)

表 10 受診前に OTC 薬を使用した理由（複数回答可）（N=262）

	感冒 N=146	消化器症状 N=61	頭痛 N=55	合計 N=262
普段、OTC 薬を使用するため（%）	52 (35.6)	9 (14.8)	8 (14.5)	69 (26.3)
OTC 薬の効果を信頼しているため（%）	14 (9.0)	9 (14.8)	12 (21.8)	35 (13.4)
OTC 薬が家にあったから（%）	81 (51.9)	37 (60.7)	29 (52.7)	147 (56.1)
受診する時間がなかったため（%）	64 (41.0)	10 (16.4)	12 (21.8)	86 (32.8)
医療機関への受診が嫌いなため（%）	8 (5.1)	6 (9.8)	1 (1.8)	15 (5.7)
その他（%）	16 (10.3)	11 (18.0)	7 (12.7)	34 (13.0)
無回答（%）	6 (3.8)	0 (0.0)	1 (1.8)	7 (2.7)

・使用した OTC 薬の種類（薬効群別）

症状ごとに使用した OTC 薬の種類を薬効群別にまとめた（表 11、12、13）。

感冒症状では、OTC 薬を使用した者（N=146）のうち、最も使用されていたのは「かぜ薬」103 人（70.5%）であり、次いで「葛根湯」20 人（13.7%）、「解熱鎮痛薬」15 人（10.3%）であった（表 11）。消化器症状では、OTC 薬を使用した者（N=61）のうち、最も使用されていたのは「胃腸薬」56 人（91.8%）であり、次いで「H2 ブロッカー」5 人（8.2%）であった（表 12）。頭痛に対して OTC 薬を使用した者（N=55）では、最も使用されていたのは「解熱鎮痛薬」38 人（69.1%）であり、次いで「かぜ薬」14 人（25.5%）であった（表 13）。

表 11 感冒症状に対し使用した OTC 薬の薬効群（複数回答可）（N=146）

	対象者数(人)	割合 (%)
かぜ薬（葛根湯含有製剤を除く）	103	70.5
鎮咳去痰薬	11	7.5
鼻炎用内服薬	5	3.4
解熱鎮痛薬	15	10.3
止しゃ薬	1	0.7
葛根湯*	20	13.7
漢方製剤（葛根湯含有製剤を除く）	8	5.5
胃腸薬	3	2.1
口内炎薬	1	0.7
滋養強壮保健薬	4	2.7
記載なし	4	2.7

*かぜ薬、漢方製剤の両方に含まれる製品があるので葛根湯というカテゴリーを設けた

表 12 消化器症状に対し使用した OTC 薬の薬効群（複数回答可）（N=61）

	対象者数(人)	割合 (%)
胃腸薬	56	91.8
H2 ブロッカー	5	8.2
制酸薬	1	1.6
葛根湯	1	1.6

表 13 頭痛に対し使用した OTC 薬の薬効群（複数回答可）（N=55）

	対象者数(人)	割合 (%)
かぜ薬（葛根湯含有製剤を除く）	14	25.5
解熱鎮痛薬	38	69.1
葛根湯*	6	10.9
漢方薬（葛根湯含有製剤を除く）	2	3.6
無回答	1	1.8

*かぜ薬、漢方製剤の両方に含まれる製品があるので葛根湯というカテゴリーを設けた。

・使用した OTC 薬の種類（入手方法別；新購入薬、常備薬）

使用した OTC 薬の種類では、OTC 薬を使用した者（N=262）のうち、最も多かったのは、「家に常備していた薬（常備薬）」177 人（67.6%）であり、次いで「新たに購入した薬（新購入薬）」76 人（29.0%）、「新購入薬と常備薬」7 人（2.7%）であった（表 14）。3 症状いずれにおいても「常備薬」を使用した人の割合が、「新購入薬」、「新購入薬と常備薬」に比べ、高かった。また、OTC 薬を使用した者より「無回答」2 人および「新購入薬と常備薬」7 人を除き、OTC 薬の種類について χ^2 検定を行ったところ、3 症状間において有意な差は見られなかった（ χ^2 検定 P=0.074）。

OTC 薬の購入先では、新購入薬使用者 [N=83（新購入薬と常備薬 7 人を含む）] のうち、「薬店・ドラッグストア」で購入した人の割合は、55~75%であり、3 症状いずれにおいても「薬局」で購入した人の割合に比べ高かった（表 15）。

表 14 使用した OTC 薬の入手（複数回答可）（N=262）

	感冒 N=146	消化器症状 N=61	頭痛 N=55	合計 N=262
新購入薬 (%)	49 (33.6)	16 (26.2)	11 (20.0)	76 (29.0)
常備薬 (%)	88 (60.3)	45 (73.8)	44 (80.0)	177 (67.6)
新購入薬と常備薬 (%)	7 (4.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (2.7)
無回答	2 (1.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (0.8)

表 15 使用した OTC 薬の購入先 (複数回答可) (N=83)

	感冒 N=56	消化器症状 N=16	頭痛 N=11	合計 N=83
薬局 (%)	15 (26.8)	4 (25.0)	3 (27.3)	22 (29.0)
薬店・ドラッグストア (%)	41 (73.2)	12 (75.0)	6 (54.5)	59 (67.6)
その他 (会社) (%)	0	0	1 (9.1)	1 (1.2)
無回答 (%)	0	0	1 (9.1)	1 (1.2)

・ OTC 薬購入時の情報提供 (新購入薬使用者のみ)

OTC 薬購入前の外箱の説明の確認状況では、新購入薬使用者 [N=73 (代理人が OTC 薬を購入した 9 人、無回答 1 人を除く)] のうち、外箱の説明を読んだ人の割合は、42 人 (57.5%) であった。症状別では、感冒症状 62.7%、消化器症状 40.0%、頭痛 57.1% であり、3 症状間に統計学的有意差は見られなかった (χ^2 検定 P=0.293) (表 16) が、消化器症状において読まなかった人の割合が高かった。また、項目別に見ると、「効能・効果」(88.1%)、「用法・用量」(69.0%)、「使用上の注意」(30.9%) であった (表 17)。

表 16 OTC 薬購入前の外箱の説明の確認状況 (複数回答可) (N=73) *

	感冒 N=51*	消化器症状 N=15*	頭痛 N=7*	合計 N=73*
読んだ (%)	32 (62.7)	6 (40.0)	4 (57.1)	42 (57.5)
読まなかった (%)	19 (37.3)	9 (60.0)	3 (42.9)	31 (42.5)

*代理人が購入した 9 人 (感冒 ; 4 人、消化器症状 ; 1 人、頭痛 ; 4 人)、無回答 1 人 (感冒 ; 1 人) を除外した。

表 17 OTC 薬購入前の項目の確認状況 (複数回答可) (N=42)

	感冒 N=32	消化器症状 N=6	頭痛 N=4	合計 N=42
使用上の注意 (%)	9 (28.1)	3 (50.0)	1 (25.0)	13 (30.9)
効能・効果 (%)	29 (90.6)	5 (83.3)	3 (75.0)	37 (88.1)
用法・用量 (%)	22 (68.8)	3 (50.0)	4 (100.0)	29 (69.0)
成分・分量 (%)	14 (43.8)	3 (50.0)	4 (100.0)	21 (50.0)

OTC 購入時の販売者（薬剤師または販売員）からの説明状況については、新購入薬使用者 [N=74（本人以外が購入した 9 人を除く）] のうち 33 人（44.6%）は、販売者からの説明を受けなかった（表 18）。その主な理由は、「購入する薬を決めていたから」（33.3%）、「使用（相談）したことがある薬だったから」（30.3%）であった（表 19）。

表 18 OTC 購入時の販売者からの説明状況 (N=74) *

	感冒 N=52*	消化器症状 N=15*	頭痛 N=7*	合計 N=74*
説明受けた (%)	32 (61.5)	6 (40.0)	3 (42.9)	41 (55.4)
説明受けなかった (%)	20 (38.5)	9 (60.0)	4 (57.1)	33 (44.6)

*代理人が購入した 9 人（感冒；4 人、消化器症状；1 人、頭痛；4 人）を除く

表 19 OTC 購入時の販売者から説明を受けなかった理由（複数回答可）(N=20)

	感冒 N=20	消化器症状 N=9	頭痛 N=4	合計 N=33
購入薬を決めていたから (%)	4 (20.0)	6 (66.7)	1 (25.0)	11 (33.3)
使用（相談）したことがある薬だったから (%)	8 (40.0)	2 (22.2)	0	10 (30.3)
いつも、購入時に相談していないから (%)	4 (20.0)	0	1 (25.0)	5 (15.2)
説明してくれなかったから (%)	4 (20.0)	1 (11.1)	0	5 (15.2)
時間がなかったから (%)	0	1 (11.1)	0	1 (3.0)
相談しやすい雰囲気ではなかったから (%)	2 (10.0)	0	1 (25.0)	3 (9.1)
外箱を読んで、不明な点がなかったから (%)	4 (20.0)	1 (11.1)	1 (25.0)	6 (18.2)
その他 (%)	3 (15.0)	2 (22.2)	0	5 (15.2)

・OTC 薬使用前の相談状況（常備薬使用者のみ）

OTC 薬使用前の相談状況については、常備薬使用者 [N=183（無回答の 1 人を除く）] のうち 61 人（33.3%）は、OTC 薬について相談をしており、相談相手は、「友人・家族」（72.1%）、「薬剤師・販売員」（26.2%）、「医師」（0.3%）であった（表 20、21）。また、OTC 薬使用前に相談しなかった者（N=122）に対し、相談しなかった理由を質問したところ、その主な理由は、「使用（相談）したことがある薬であったため」95 人（77.2%）、「不明な点がなかったから」26 人（21.1%）、「いつも相談しないから」25 人（20.3%）であった（表 22）。なお、OTC 薬使用前の相談状況は、3 症状間で統計学的有意差はみられなかった（ χ^2 検定 P=0.740）。

表 20 OTC 薬使用前の相談状況 (N=183)

	感冒 *N=94	消化器症状 N=45	頭痛 N=44	合計 *N=183
相談した (%)	32 (34.0)	13 (28.9)	16 (36.4)	61 (33.3)
相談しなかった (%)	62 (66.0)	32 (71.1)	28 (63.6)	122 (66.7)

*無回答の 1 人を除外した。

表 21 OTC 薬使用前の相談相手 (複数回答可) (N=61)

	感冒 N=32	消化器症状 N=13	頭痛 N=16	合計 N=61
医師 (%)	0	0	2 (12.3)	2 (0.3)
薬剤師・販売員 (%)	15 (46.9)	0	1 (6.3)	16 (26.2)
友人家族 (%)	19 (59.4)	12 (92.3)	13 (81.3)	44 (72.1)
製薬企業 (%)	0	0	0	0
その他 (%)	2 (6.3)	1 (7.7)	0	3 (4.9)

表 22 OTC 薬使用前に相談しなかった理由 (複数回答可) (N=122)

	感冒 N=62	消化器症状 N=32	頭痛 N=28	合計 N=122
使用 (相談) したことがある薬であったため (%)	34 (54.8)	20 (62.5)	23 (82.1)	95 (77.9)
いつも相談しないから (%)	16 (25.8)	6 (18.8)	3 (10.7)	25 (20.5)
どこに相談するべきか分からないから (%)	2 (3.2)	1 (3.1)	1 (3.6)	4 (3.3)
不明な点がなかったから (%)	15 (24.2)	4 (12.5)	7 (25.0)	26 (21.3)
その他 (%)	5 (8.1)	7 (21.9)	2 (7.1)	14 (11.5)

・ OTC 薬使用前の添付文書等の確認状況

OTC 薬使用者 (N=262) のうち、使用前に最も読まれていたのは外箱の説明 190 人 (72.5%) であり、次いで添付文書 159 人 (60.7%)、ラベル (瓶) 90 人 (34.4%) であった (図 1)。3 症状いずれにおいても同様の傾向が見られた (図 2、3、4)。また、項目別に見ると「効能・効果」は 182 人 (69.5%)、「用法・用量」は 174 人 (66.4%) であるのに対し、「成分・分量」は 60 人 (22.9%)、「相談すること」は 45 人 (17.2%) であった (図 5)。3 症状いずれにおいても、「成分・分量」、「相談すること」は、他の項目に比べて読まれていなかった (図 6、7、8)。

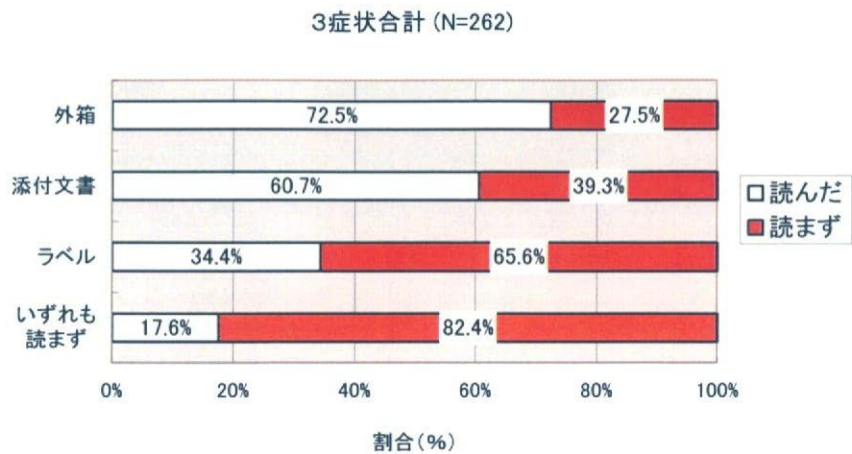


図 1 OTC 薬使用前の情報源の確認状況 (複数回答可) (3 症状) (N = 262)

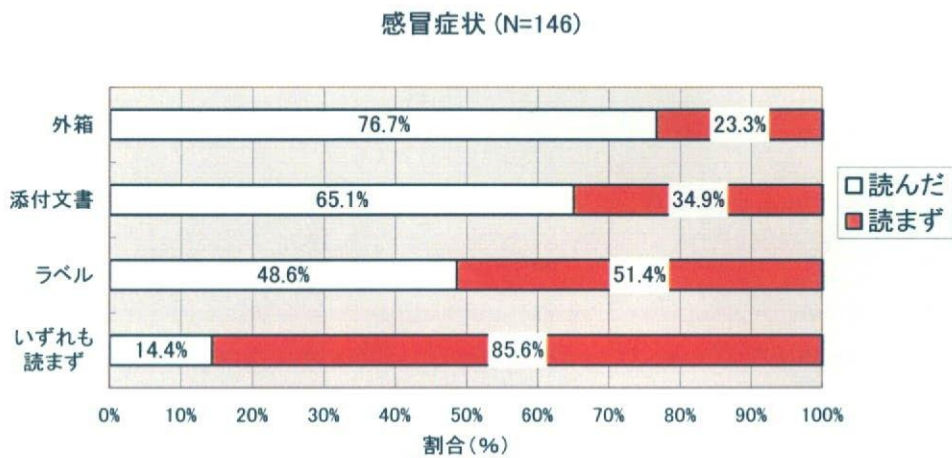


図 2 OTC 薬使用前の情報源の確認状況 (複数回答可) (感冒症状) (N = 146)

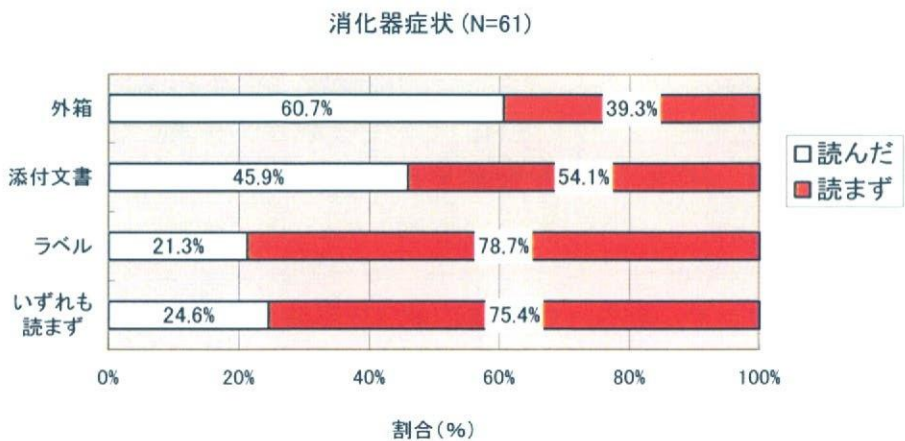


図 3 OTC 薬使用前の情報源の確認状況 (複数回答可) (消化器症状) (N = 61)

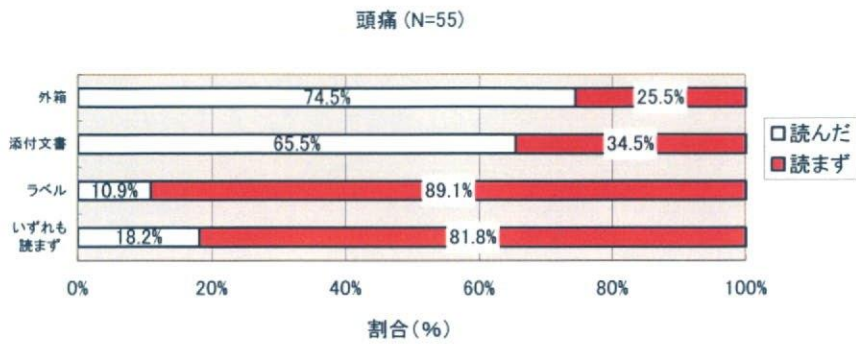


図 4 OTC 薬使用前の情報源の確認状況 (複数回答可) (頭痛) (N=55)

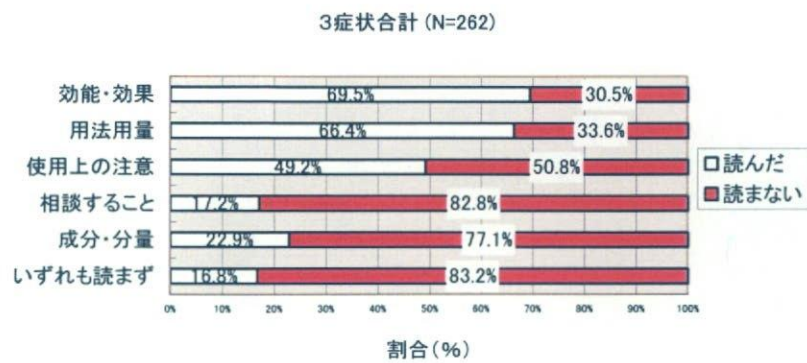


図 5 OTC 薬使用前の項目の確認状況 (複数回答可) (3 症状) (N=262)



図 6 OTC 薬使用前の情報源の確認状況 (複数回答可) (感冒症状) (N=146)

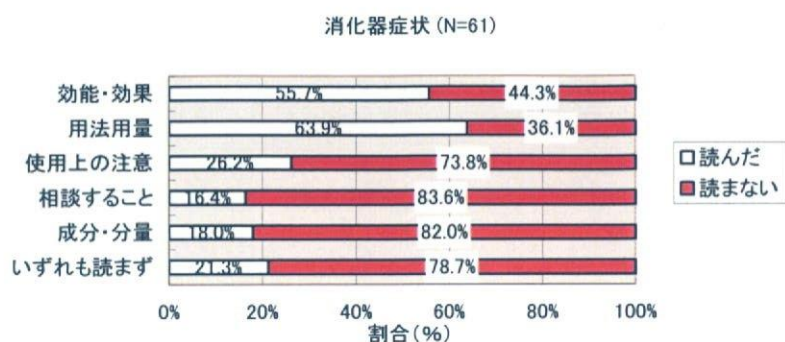


図 7 OTC 薬使用前の情報源の確認状況 (複数回答可) (消化器症状) (N=61)

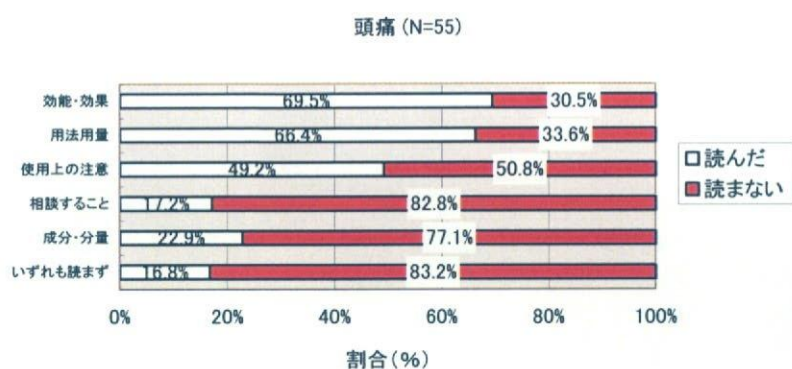


図 8 OTC 薬使用前の情報源の確認状況 (複数回答可) (頭痛) (N=55)

・OTC 薬の適正使用状況 [用法・用量、服用日数・服用回数]

適正使用状況については、OTC 薬使用者 (N=216: 添付文書等を読んでいない者 46 人を除外した) のうち、89.8%が定められた用法・用量を遵守したと回答した (図 9、10、11、12)。また、OTC 薬使用者 (N=240: 無回答 22 人を除外した) のうち、82.9%が服用日数・服用回数 (添付文書の記載に基づいて、感冒症状では 3 日以内、消化器症状では 2 週間以内、頭痛では 6 回以内の服用を遵守とした) 遵守したと回答した (図 13、14、15、16)。用法・用量 (フィッシャーの直接確率法 $P=0.053$)、服用日数・回数 (χ^2 検定 $P=0.615$) では、3 症状間に統計学的有意差が見られなかった。

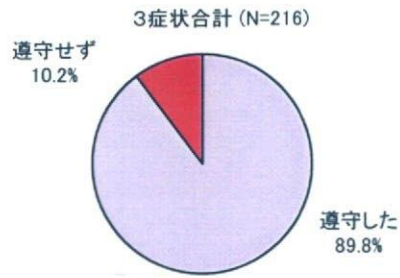


図 9 OTC薬の用法・用量の遵守 (3症状) (N=216)

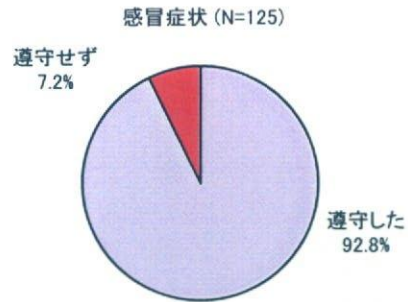


図 10 OTC薬の用法・用量の遵守 (感冒症状) (N=125)

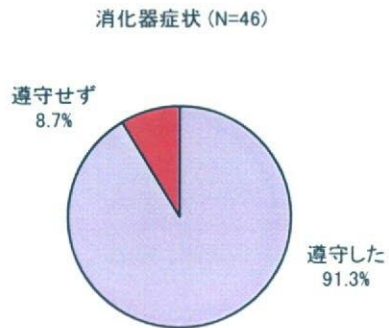


図 11 OTC薬の用法・用量の遵守 (消化器症状) (N=46)

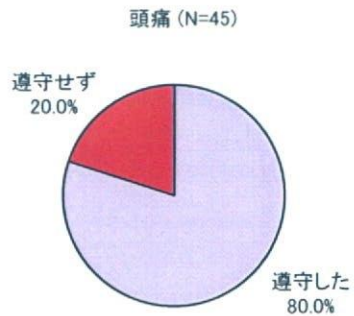


図 12 OTC薬の用法・用量の遵守 (頭痛) (N=45)



図 13 OTC 薬の服用日数の遵守 (3 症状) (N = 240)

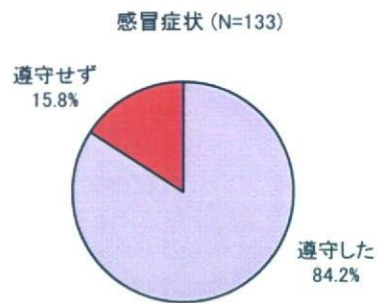


図 14 OTC 薬の服用日数の遵守 (感冒症状) (N = 133)

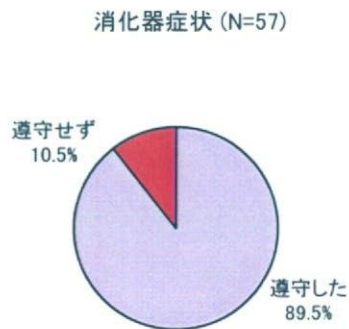


図 15 OTC 薬の服用日数の遵守 (消化器症状) (N = 57)

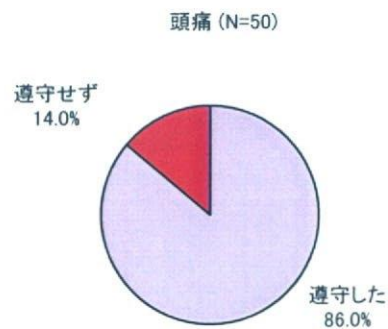


図 16 OTC 薬の服用日数の遵守 (頭痛) (N = 50)

頭痛症状の患者での OTC 薬適正使用状況について、平成 14～16 年度厚生労働科学研究；慢性頭痛診療ガイドライン（2005）で推奨された OTC 薬使用基準 [①頭痛の重症度が軽症（生活支障がない）または②OTC 薬を月 10 日未満使用のいずれかを満たすこと]⁵⁾を用いて再度評価した。頭痛に対して OTC 使用した者（N=49：無回答 22 人を除外した）のうち、OTC 薬使用基準を満たした者は、9 人（18.4%）であった（表 23）。

表 23 OTC 薬使用基準の遵守（N=49）*

	対象者（人）	割合（%）
遵守した	9	18.4
遵守せず	40	81.6

*無回答 6 人を除く

・ OTC 薬の長期使用状況（消化器症状、頭痛のみ）

受診前に OTC 薬を使用した者のうち、OTC 薬を長期使用（1 ヶ月以上繰り返し使用）した者の割合は、消化器症状では 21.7%、頭痛では 25.5%であり、症状間に統計学的な有意差は見られなかった（表 24、25）（ χ^2 検定 P=0.635）。

表 24 OTC 薬の長期使用状況（消化器症状）（N=60）*

	対象者数（人）	割合（%）
はい	13	21.7
1～5 ヶ月	4	6.7
6～11 ヶ月	4	6.7
1 年以上	5	8.3
いいえ	47	78.3

*無回答 1 人を除く

表 25 OTC 薬の長期使用状況（頭痛）（N=51）*

	対象者数（人）	割合（%）
はい	13	25.5
1～5 ヶ月	4	7.8
6～11 ヶ月	1	2.0
1 年以上	8	15.7
いいえ	38	74.5

*無回答 4 人を除く